

佳作

希望を与えるスポーツの価値

香川県 高松第一高等学校二年 松濤 晴紀

「たくさんの方に応援していただいたのに銀メダルに終わってしまったて申し訳ない。日本選手団の主将として金メダルを取らないといけないところだったのに、ごめんなさい。」

レスリングの吉田沙保里選手が試合後に涙をこぼしながら言った言葉だ。銀メダルを取っているにもかかわらず、日本国民に対して謝罪しているのだ。私はこの言葉を聞いて、彼女はアスリートとして素晴らしく、美しいと思った。応援し、支援し続けてくれた日本国民に対しての感謝、その期待に応えられなかったことへの悔しさがその発言から見てとれる。以前、陸上のウサイン・ボルト選手がニュースでこう言っていた。

「数年前から、誰かに追いかけられる夢を見ます。どんなに早く走っても、逃げられないのです。捕まりはしません、逃げ切ることもできない、ひたすら走り続ける、そんな夢です。」
彼はなぜこのような夢を見るのかと問われた時、考えな

いようにしていると答えている。これはボルト選手が王者であるがゆえに、その王者の座を守らなければならぬという苦悩と重圧が招いている悪夢だと僕は考えている。オリンピックで三連覇するほどの力を持っている彼であつても、四連覇がかかったリオのオリンピックを前にして、毎日が不安との闘いであつたのだろう。それでもその苦難をものともせずに跳ね返すだけの自己の力はずごいものだと思う。それは吉田選手も同じであつたのだろう。

そうは言っても、銀メダルである。世界で二位の偉業に変わりはない。今年のオリンピックでは卓球の水谷選手やバドミントンの高橋選手、松友選手らをはじめとする日本人がメダルをもたらしている。吉田選手となら変わりのないメダルである。だが、それぞれのメダルに対する思いは相反するものである。片や喜びや感謝、片や悔しさや責任。霊長類最強の女の名は吉田選手の十六年間を苦しめていたのだろう。それと同時に、決勝まで相手に得点を取らせず余裕の戦いぶりを見せた強さの源は、十六年間彼女を苦しめたものそのものであろう。彼女を強くしたのは他でもない、その苦しきさだ。ボルト選手、吉田選手のようにスポーツで結果を残していくということは、周りの期待も大きくなるということである。それはつまり、結果を残すほど周りからの重圧が大きくなるということだ。となると、結果を出し続けている吉

田選手は真の強者なのだ。

スポーツをする人は競技をしていく上で、大きな壁に行く手を阻まれることは多々ある。競技を突き詰めるのであるならばなおさらである。当然私もその壁に何度もぶつかったことがある。しかし、私はその壁を越える努力をしようとしてすぐに挫折し、諦めてきた。遠回りをしても違う道を選んでここまでできたのだ。今となってはこのことを後悔している。だが今となってもその壁を乗り越えることができている。私は今年のオリンピックを見ても考えさせられた。壁を乗り越えなければ進歩することはないし、遠回りしようとしてもいつかはまた同じ壁にぶつかってしまうだろう。困難に直面した時、解決しようとは挑戦すべきなのだ。挑戦することも後に自分の力となって返ってくるはずだ。自分の競技人生はそう長くない。この時期に吉田選手をはじめとする、世界で結果を残した日本代表選手を見てみると、今までの自分は、心のどこかで自分に甘えていたのだと思う。それに気付けたのがこの時期で良かったと思う。まだ競技人生は終わったわけではないし、これからの気持ち次第で最終的な結果は大きく変わっていくだろう。吉田選手のように人に感謝し、自分のプレーに自信を持てるような選手になりたい。

このように思うきっかけを作ってくれたのは吉田沙保里選手、リオのオリンピックである。スポーツは人々に

よい影響を与えられたい。私はこの夏、気づいた時には良い影響をすでに受けていた。これは私だけではないだろう。スポーツはこれからも世界中に希望を与える象徴として大切にしていかなければならない。